潮流

「コミュニケーション力」という言葉をよく耳にするようになった。2010年3月卒業の新卒採用に関するアンケートの「選考時に重視する要素（日本経済団体連合会10年4月14日）」を見ると、「コミュニケーション能力（81・6％）」は、7年連続の第1位で、もはや不動のようだ。

鳥取大学医学部准教授　高塚　人志

「コミュニケーション力」

ところが近年、教育現場で「人と関わるのが苦手な子どもや若者が目立つようになった」という声を耳にする機会が増えた。それは子どもや若者だけの問題ではない。人間関係が希薄になりつつある時代の流れに加えて、少子高齢化、核家族化、メールやインターネットの普及などによって、家族のあり方や地域社会の結びつきも変わってきた。

それにより、生身の人間との関わり体験が未熟なまま人が育ち、人間関係がうまくいかず息苦しさを感じながら生きている大人も少なくない。国民的規模で、人とより良い関係を築く力が未熟になっているのではないか。

教育現場で今日まで子どもや若者と関わってきて、気づいたことがある。大人の目を気にして必要以上に神経をつかい、仲間にも異常な気をつかう。ここという踏ん張りがきかず、多少の困難でモチベーションが下がり、心が折れやすく切れやすい。そんな子どもや若者に出会う場が増え、私は危機意識をもつようになった。

さまざまな人との出会いから人間関係のはざまで、もまれる体験が少なくなった結果、人間関係やコミュニケーションがうまくいかない子どもや若者が増えているのである。

「人の間」と書いて「人間」と読む。人間にとって人間関係は、避けては通れない。その関係を心地よく濃密にするためにこそ、コミュニケーションが大きな力を発揮する。これが、十数年間、コミュニケーションに関する授業や研修を続けてきた私の実感である。

コミュニケーションとは、「お互いの考えや気持ちを理解しあうこと」だと私は定義している。この力を磨くことは、人がやる気を出し、前向きに生きることを後押しする自己肯定感を育むことにつながる。

さらに、この力を伸ばすことが人づくりの土台となる。その土台の上にこそ、知識や技術が大きく育っていくはずだ。今こそ、しっかりとした土台を築くことが、子育てや教育に求められている。そのためには、小学校のような早い時期から自分自身と向き合い、さまざまな人々との関わりを通して、コミュニケーション力を育む継続的な学習の場を作ることが重要だと痛感する。一昔前のように、大勢の家族や地域の中で、他者と向きあう力を自然と身につけることが難しくなったからだ。

人間関係やコミュニケーションの学習を継続的に行えば、子どもたちは、コミュニケーション力を身につけ、そばにいる人を大切に思うようになる。また、彼らは、家庭や地域、職場でも人とのつながりを大切にするはずだ。そして、日本は再びホスピタリティー・マインド（思いやりの心）あふれる心のあたたかい国に生まれ変わる。明日の輝く日本の扉が開かれるのだ。（琴浦町）